

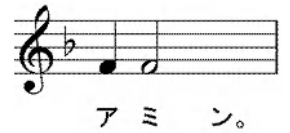
## 主 日 前 晩 課

### 第5調

注意 譜面中、五線譜上に  $\parallel\circ\parallel$  とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2024年09月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、



司祭) きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

きた かれ こうはいふふく  
來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠（首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ） 】

わ が た ま し い よ お 、 しゅ を ほ め え あ げ よ 。  
我 靈 主 讃 揚

しゅ よ 、 なん ぢ い は あ が め ほ め え ら る 。 しゅ 主  
主 爾 崇 讃

わ が か み よ 、 なん ぢ は い た っ て お お い な り 。  
我 神 爾 至 大

しゅ よ 、 なん ぢ い は あ が め ほ め え ら る 。 な 爾  
主 爾 崇 讃

ん ぢ は こ お え い と い げ ん と を こ お む う れ り 。  
光 榮 威 嚴 被

しゅ よ 、 なん ぢ い は あ が め ほ め え ら る 。 や ま 山  
主 爾 崇 讃

の い た だ あ き に み ズ た つ う み い づ た 立  
嶺 水 立

つ 。 しゅ う よ 、 なん ぢ の し わ ざ あ は あ き い い な  
主 爾 工 業 奇 異



り。



やまのあいだあにいみづながるう、みい  
山 間 水 流 水



づなあがる。しゅうよ、なんちのしわざあはあきい  
流 主 爾 工業 奇



いなり。  
異



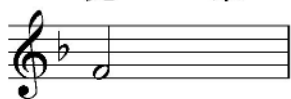
みなちえをもつてつくれりちえ  
皆 智慧 以 作 智 慧



をもつてつくれり。  
以 作



こおえいはなんちばんぶつをつくりししゅにいき  
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸



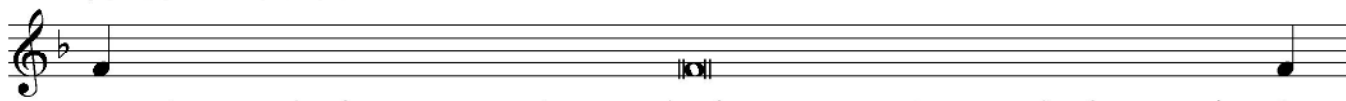
す。



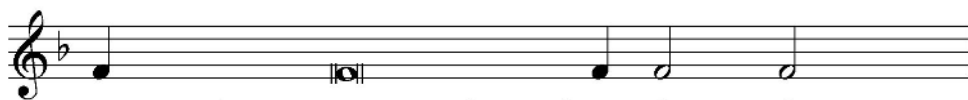
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



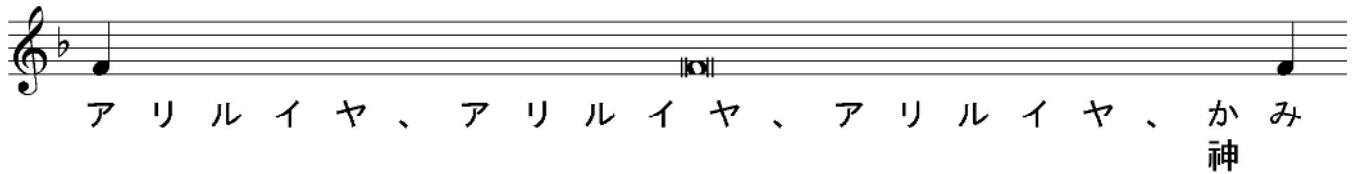
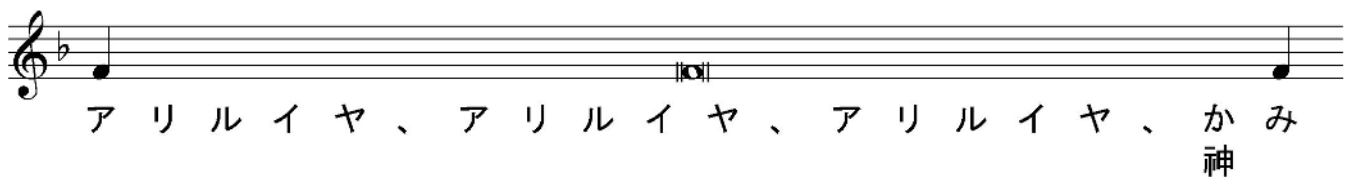
いつもよよに、アミン。  
何時 世 世



アリュイヤ、アリュイヤ、アリュイヤ、かみ  
神



よこうえいはなんちにきす。  
光 榮 爾 歸 ず。



【 大聯禱 】

司祭) <sup>われらあんわ</sup>我等安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



司祭) <sup>うえ</sup>上より<sup>くだ</sup>降る安和と<sup>われら</sup>我等が<sup>たましい</sup>靈の<sup>すくい</sup>救の<sup>ため</sup>爲に<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



司祭) <sup>ぜんせかい</sup>全世界の安和、<sup>かみ</sup>神の<sup>せい</sup>聖なる<sup>しよきようかい</sup>諸教會の<sup>けんりつ</sup>堅立、及び<sup>およ</sup>衆人の<sup>しゅうじん</sup>合一の<sup>ごういつ</sup>爲に<sup>ため</sup>主に<sup>しゅ いの</sup>禱らん、



司祭) <sup>こ</sup>此の<sup>せいどう</sup>聖堂、及び<sup>およ</sup>信と<sup>しん</sup>慎と<sup>つつしみ</sup>神を<sup>かみ</sup>畏るる<sup>おそ</sup>心とを<sup>こころ</sup>以て<sup>もつ</sup>此に<sup>ここ</sup>來る<sup>きた</sup>者の<sup>もの</sup>爲に<sup>ため</sup>主に<sup>しゅ いの</sup>禱らん、



司祭) <sup>きようかい</sup>教會を<sup>つかさど</sup>司る<sup>そんき</sup>尊貴なる<sup>われら</sup>我等の<sup>ぜんにほん</sup>全日本の<sup>ふしゅきよう</sup>府主教<sup>しさい</sup>セラフィム、<sup>そんびん</sup>司祭の<sup>しさい</sup>尊品、<sup>ハリス</sup>ハリス

<sup>よ</sup>トスに<sup>ほさいしよく</sup>因る<sup>ことごと</sup>輔祭職、<sup>きようしゅう</sup>悉くの<sup>およ</sup>教衆、<sup>しゅうじん</sup>及び<sup>ため</sup>衆人の<sup>しゅ いの</sup>爲に<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



司祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの</sup> 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの</sup> 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの</sup> 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ</sup> 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び  
<sup>かれら すくい ため しゅ いの</sup> 彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの</sup> 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



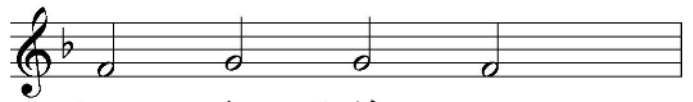
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

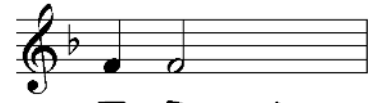
<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



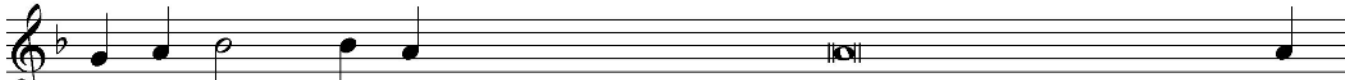
しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだし</sup>蓋、<sup>およ</sup>凡<sup>こうえい</sup>そ<sup>そん</sup>光<sup>き</sup>榮<sup>ふく</sup>尊<sup>はい</sup>貴<sup>なんぢ</sup>伏<sup>ち</sup>拜<sup>こ</sup>は<sup>せい</sup>爾<sup>しん</sup>父<sup>き</sup>と<sup>いま</sup>子<sup>いつ</sup>と<sup>よ</sup>聖<sup>よ</sup>神<sup>よ</sup>に<sup>よ</sup>歸<sup>よ</sup>す、<sup>よ</sup>今<sup>よ</sup>も<sup>よ</sup>何<sup>よ</sup>時<sup>よ</sup>も<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、

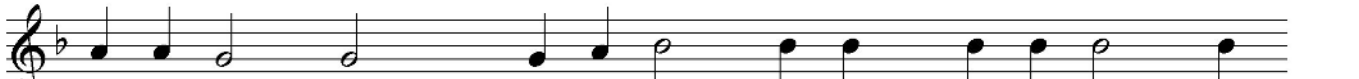


ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



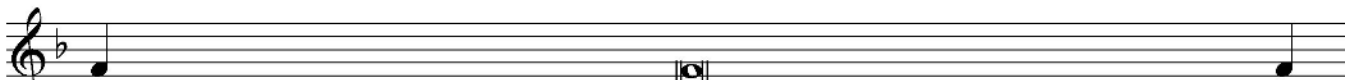
あくにんのはかりごとによかざるひとはさい  
悪人 謀 行 人 福



わいなり、ア ril イヤ、ア ril イ



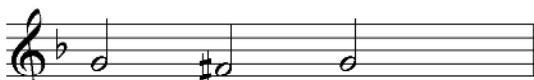
ヤ、ア ril イヤ。



しゅはぎじんのみちをしる、あくにんのみちはほろ  
主義 人 途 知 悪 人 途 滅



びん、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア リ



ル イ ヤ 。



おそれてしゅにつとめよ、おののきてそのまえ  
畏 主 勤 戦 其 前



によろこべよ、ア ril イヤ、ア ril イ  
喜



ヤ、ア ril イヤ。

およそかれをたのむものはさいわいなり、  
凡 彼 特 者 福

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル

イ ヤ。

しゅやたてよ、わがかみや、われをすくいた給  
主 立 吾 神 我 救 給

まえ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、

ア リ ル イ ヤ。

すくいはいしゅによるなんぢのこうふくはなんぢのた  
救 主 依 爾 降 福 爾 民

みにあり、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ

ヤ、ア リ ル イ ヤ。

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、ア ミ ン。ア リ ル イ ヤ、ア

リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ  
蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第5調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた  
主 爾 呼 速 我 格 給  
ま え 、 しゅよわれにききたまえ、しゅ  
主 我 聽 給 主  
よなんぢによぶすみやかにわれにいたりたま  
爾 呼 速 我 格 給  
え 。 な ん ぢ に よ ぶ と き わ が い の り の こ え を  
爾 呼 時 我 禱 の 聲





いれたたまえ、しゅよわれにききたま  
納給主我聴給

あえ。ねがわくはわがいのりはこう香  
願我禱

ろのかおりのごとくなんぢがかんばせのまえ  
爐香如爾顔

にのぼおり、わがてをあぐるはくれのま祭  
登我手舉暮

つりのごとくいれられん。しゅよわれにき  
如納主我聴

きたまあえ。

誦經) <sup>しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ</sup> 主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾  
<sup>ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ せし なか ねが われ かれら あまみ な</sup> きて、不法を行 う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め  
<sup>ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ あぶら わ</sup> ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美しき膏、我  
<sup>こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお</sup> が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の惡事に敵す。彼等の首長は巖石  
<sup>あいだ さん わ ことば にゅうわ き われら つち ごと きくた わ ほね ぢごく うち</sup> の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の口  
<sup>ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ</sup> に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる  
<sup>なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか</sup> 母れ。我が爲に設けられし 彌、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹  
<sup>ただわれ す え</sup> り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

<sup>わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい</sup> 我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を  
<sup>そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい</sup> 其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、  
<sup>かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ</sup> 彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

の<sup>が</sup> ところ<sup>と</sup> なく、わ<sup>が</sup> た<sup>ま</sup>しい<sup>い</sup> か<sup>え</sup>り<sup>み</sup> も<sup>の</sup> し<sup>ゅ</sup> わ<sup>れ</sup>なん<sup>ぢ</sup> よ<sup>い</sup> なん<sup>ぢ</sup> わ<sup>れ</sup>  
に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の

かく<sup>れ</sup>が<sup>い</sup> も<sup>の</sup> ち<sup>お</sup>い<sup>わ</sup>れ<sup>ぶ</sup>ん わ<sup>よ</sup> き<sup>た</sup>ま わ<sup>れ</sup>は<sup>な</sup>は<sup>だ</sup>よ<sup>わ</sup>  
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聞き給え、我甚弱りたれば

わ<sup>れ</sup> は<sup>く</sup>が<sup>い</sup> も<sup>の</sup> す<sup>く</sup> た<sup>ま</sup> か<sup>れ</sup>ら<sup>わ</sup>れ<sup>つ</sup>よ  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ わ<sup>が</sup> た<sup>ま</sup>しい<sup>い</sup> ひ<sup>と</sup>や<sup>ひ</sup> い<sup>だ</sup> わ<sup>れ</sup> なん<sup>ぢ</sup> な<sup>さん</sup>え<sup>い</sup> た<sup>ま</sup>  
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給え。

讃詞⑩ なん<sup>ぢ</sup> と<sup>う</sup>と<sup>じ</sup>ゅう<sup>じ</sup>か<sup>あ</sup>く<sup>ま</sup> は<sup>づ</sup>か<sup>ふ</sup>く<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>み<sup>は</sup>り<sup>に</sup>ぶ<sup>に</sup>  
ハリストスよ、爾は尊き十字架にて悪魔を辱しめ、復活にて罪の整刺を鈍くし、

わ<sup>れ</sup>ら<sup>し</sup> も<sup>ん</sup> す<sup>く</sup> た<sup>ま</sup> ど<sup>く</sup>せい<sup>し</sup> わ<sup>れ</sup>ら<sup>なん</sup>ぢ<sup>さん</sup>え<sup>い</sup>  
我等を死の門より救い給えり。獨生子よ、我等爾を讃榮す。

句⑨ なん<sup>ぢ</sup>お<sup>ん</sup> わ<sup>れ</sup> た<sup>ま</sup> と<sup>き</sup> ぎ<sup>じ</sup>ん わ<sup>れ</sup> め<sup>ぐ</sup>  
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ じん<sup>る</sup>い<sup>ふ</sup>く<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>ま<sup>し</sup>ゅ<sup>ひ</sup>つ<sup>じ</sup> ご<sup>と</sup> ほ<sup>ふ</sup>り<sup>た</sup>め<sup>ひ</sup> ち<sup>ご</sup>く<sup>き</sup>み<sup>こ</sup>れ<sup>お</sup>そ  
人類に復活を賜う主は羊の如く屠宰の爲に牽かれたり。地獄の君は之を畏れ、

かな<sup>し</sup>み<sup>も</sup>ん<sup>あ</sup> け<sup>だ</sup>し<sup>こ</sup>う<sup>え</sup>い<sup>お</sup>う<sup>い</sup> な<sup>わ</sup>め<sup>あ</sup> も<sup>の</sup> い<sup>い</sup>  
悲の門は擧げられたり、蓋光榮の王ハリストスは入りて、縛に在る者に出でよ、

くら<sup>や</sup>み<sup>あ</sup> も<sup>の</sup> あ<sup>ら</sup>わ<sup>い</sup>  
幽暗に在る者に顯れよと言えり。

句⑧ し<sup>ゅ</sup> わ<sup>れ</sup>ふ<sup>か</sup> と<sup>こ</sup>ろ<sup>なん</sup>ぢ<sup>よ</sup> し<sup>ゅ</sup> わ<sup>こ</sup>え<sup>き</sup> た<sup>ま</sup>  
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聞き給え、

讃詞⑧ お<sup>お</sup>い<sup>き</sup>せ<sup>き</sup> み<sup>も</sup>の<sup>ぞ</sup>う<sup>せい</sup>し<sup>ゅ</sup> ひ<sup>と</sup> あ<sup>い</sup> よ<sup>み</sup> く<sup>る</sup>しみ<sup>う</sup> ふ<sup>ふ</sup>  
大なる奇跡や、見えざる者の造成主は、人を愛するに因りて、身にて苦を受け、不

し<sup>も</sup>の<sup>ふ</sup>く<sup>か</sup>つ<sup>し</sup>ょ<sup>み</sup>ん<sup>し</sup>ょ<sup>ぞ</sup>く<sup>き</sup>た<sup>こ</sup>れ<sup>ふ</sup>く<sup>は</sup>い<sup>け</sup>だ<sup>し</sup>そ<sup>の</sup>め<sup>ぐ</sup>み<sup>よ</sup> わ<sup>れ</sup>ら<sup>ま</sup>よ<sup>い</sup>  
死の者は復活せり。諸民諸族來りて、之に伏拜せん、蓋其恵に因りて、我等は迷

の<sup>が</sup> さん<sup>い</sup> ゆ<sup>い</sup>いち<sup>か</sup>み<sup>う</sup>た<sup>なら</sup>  
より脱れて、三位にして惟一なる神を歌うを習えり。

句⑦ ね<sup>が</sup> なん<sup>ぢ</sup> み<sup>み</sup> わ<sup>い</sup>の<sup>り</sup> こ<sup>え</sup> き<sup>い</sup>  
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聞き納れん。

讃詞⑦ わ<sup>れ</sup>ら<sup>く</sup>れ<sup>ふ</sup>く<sup>は</sup>い<sup>なん</sup>ぢ<sup>く</sup> ひ<sup>か</sup>り<sup>た</sup>て<sup>まつ</sup> なん<sup>ぢ</sup> よ<sup>す</sup>え<sup>か</sup>が<sup>み</sup> お<sup>ご</sup>と<sup>み</sup>  
我等暮の伏拜を爾暮れざる光に奉る、爾は世の季に、鏡に於けるが如く、身

よ<sup>せ</sup>か<sup>い</sup> か<sup>が</sup>や<sup>ち</sup>ご<sup>く</sup> く<sup>だ</sup> か<sup>し</sup>こ<sup>くら</sup>や<sup>み</sup> や<sup>ぶ</sup> ふ<sup>く</sup>か<sup>つ</sup> ひ<sup>か</sup>り<sup>し</sup>ょ<sup>み</sup>ん<sup>に</sup>  
に藉りて世界に輝き、地獄にまで降り、彼処にある幽暗を破り、復活の光を諸民に

あ<sup>ら</sup>わ<sup>た</sup>ま<sup>ひ</sup>か<sup>り</sup> ほ<sup>ど</sup>こ<sup>し</sup>ゅ<sup>こ</sup>う<sup>え</sup>い<sup>なん</sup>ぢ<sup>き</sup>  
顯し給えり。光を施す主よ、光榮は爾に歸す。

句⑥ し<sup>ゅ</sup> も<sup>なん</sup>ぢ<sup>ふ</sup>ほう<sup>た</sup>だ<sup>し</sup>ゅ<sup>だ</sup>れ<sup>よ</sup> た<sup>しか</sup> なん<sup>ぢ</sup> ゆ<sup>る</sup>し<sup>ひ</sup>と<sup>なん</sup>ぢ<sup>に</sup>  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾

ま<sup>え</sup> つ<sup>つ</sup>し<sup>た</sup>め<sup>に</sup>  
の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ わ<sup>れ</sup>ら<sup>わ</sup> す<sup>く</sup>い<sup>か</sup>し<sup>ら</sup> さん<sup>し</sup>ょう<sup>け</sup>だ<sup>し</sup>か<sup>れ</sup>し<sup>ふ</sup>く<sup>か</sup>つ<sup>せ</sup>か<sup>い</sup> ま<sup>よ</sup>い<sup>に</sup>  
我等はハリストス我が救の首を讃頌す、蓋彼死より復活せしに、世界は迷よ

す<sup>く</sup> わ<sup>れ</sup>たり<sup>て</sup>ん<sup>し</sup> ぐ<sup>ん</sup> よ<sup>ろ</sup>こ<sup>あ</sup>く<sup>ま</sup> い<sup>ぎ</sup>ない<sup>さ</sup> お<sup>お</sup>  
り救われたり、天使の軍は歡び、悪魔の誘は去り、墜ちたるアダムは起き、ディアヴォ

む<sup>な</sup>  
ルは空しくせられたり。

句⑤ わ<sup>れ</sup>し<sup>ゅ</sup> の<sup>ぞ</sup> わ<sup>た</sup>ま<sup>しい</sup>し<sup>ゅ</sup> の<sup>ぞ</sup> わ<sup>れ</sup>か<sup>れ</sup> こ<sup>と</sup>ば<sup>た</sup>の<sup>を</sup>  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

讃詞⑤ 番兵は不法の者より教えられたり、ハリストスの復活を匿せ、銀を受けて云え、我等が

寝ねたる時、死者は墓より竊まれたりと。誰か之を見たる、誰か何時か死者の竊まれしを  
聞きたる、況や其香料を傳られ、裸體になり、斂葬の衣を墓に遺したるをや。イウ  
デヤ人よ、惑う母れ、諸預言者の言を学びて、彼が實に世界の贖罪者及び全能  
者なるを悟れ。

句④ 我が霊主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ 地獄を虜にし、死を滅しし主、尊き十字架にて世界を照しし我が救世主よ、我  
等を憐み給え。

句③ 願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼  
はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③ 至淨なる者よ、爾は諸造物より最高き者にして、實にヘルヴィムの如き寶座と爲  
れり、蓋神の言は我等の像を興さんと欲して爾の内に入り、身を以て爾より出で  
て、我等の爲に十字架の苦を受けて、神として、我等の變ぜられたる性、曾て定罪  
せられし者に復活を賜えり。故に神の母よ、我等は爾の子を造成主として、彼に審  
判の時に我等に赦免と矜憐とを賜わんことを祈る。

句② 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讃詞② 潔き神の母よ、我何を以て爾の至榮なる教会を稱せんか、エデムの園とせん、  
ノイの舟、即神の爲に王たる司祭班、聖なる人民、ハリストス我が神の會を救い  
し者とせん。爾をモイセイの約櫃に譬えん、其内に贖罪所及び華を生ぜし杖あ  
り、燈臺、マンナの壺、及び金の香炉あり、凡の信者は之に趨り附きて、大なる憐  
を求め得るなり。

句① 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞① 獨冀望を失いし者の冀望、佑助なき者の爲に備わりたる佑助、仁慈を施す主イ  
スを生みし潔き者よ、今我が劣弱を憐み、我が思情に傷感を與え、我が涙の

ながれ もつ わ つみ ふち か わ むりょう よく あらし しづ わ みだ こころ しんせい  
流を以て我が罪の淵を涸らし、我が無量の愆の暴風を鎮め、我が乱れたる心を神聖

へいおん み わ しよざい まつた ゆるし たま いの たま  
なる平穩に充てて、ハリストスに我が諸罪の全き赦を賜わんことを祈り給え。

【 ドグマチカ (生神女讃詞) 第5調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
も い つ う も お よ お よ に 、 ア ミ ン 。  
何 時 世 世  
む か し く れ な い の う み に て こ ん い ん を し ら  
昔 紅 海 婚 姻 知  
ざ る よ め の か た ち し る さ れ た り 。 か し こ  
聘 女 象 記 彼 處  
に は モ イ セ イ み づ を わ か つ も の 、 こ こ に は  
水 分 者 此 處  
ガ ヴ リ イ ル き せ き に つ と む る も の な り 。 か の  
奇 迹 務 者 彼  
と き イ ズ ラ イ リ は あ し を め ら さ ず し て ふ か み を あ 歩  
時 足 濡 深 處 歩  
ゆ み 、 い ま どう て い ぢ ゃ は た ね な く し て  
今 童 貞 女 種  
ハ リ ス ト ス を う め え り 。 う み は イ ズ ラ イ リ の わ た  
生 海 涉  
り し の ち も と の ま ま と お ら れ ず 、 き ず な  
後 元 過 ず 瑕

き も の は エ ム マ ヌ イ ル を う み し の ち も と の ま ま き ず  
 者 生 後 元 末 瑕  
 な し 。 え い え ん に し て い と え い え ん な る も 者  
 永 遠 最 永 遠  
 の ひ と と な り て あ ら わ れ し か み よ 、 わ  
 人 現 神 我  
 れ ら を あ わ れ み た ま あ え 。  
 等 憐 給

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父  
 せ い な る こ う え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 穩 光  
 ス ス ハ リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
 我 等 日 入 至 暮  
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 を う と お う 。 い の ち を た も う か み の こ 子  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ 、 な ん ち は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 る べ し 、 ゆ え に せ か い は な ん ち を あ が め  
 故 世 界 爾 を 崇

ほむ。  
讚

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて<sup>しゅうじん</sup>聴く<sup>へいあん</sup>べし、<sup>えいち</sup>衆人に平安、睿智、

誦經) <sup>プロキメン</sup>提綱、<sup>しゅ</sup>主は<sup>おう</sup>王たり、<sup>かれ</sup>彼は<sup>いげん</sup>威嚴<sup>き</sup>を衣たり、

しゅはおうたり、かれはいげんをきたり、  
主王 彼 威嚴 衣  
り、

誦經) <sup>しゅ</sup>主は<sup>のうりよく</sup>能力<sup>き</sup>を衣、<sup>またこれ</sup>又<sup>おび</sup>之を帯にせり、

しゅはおうたり、かれはいげんをきたり、  
主王 彼 威嚴 衣  
り、

誦經) <sup>ゆえ</sup>故に<sup>せかい</sup>世界は<sup>けんご</sup>堅固にして<sup>うご</sup>動かざらん、

しゅはおうたり、かれはいげんをきたり、  
主王 彼 威嚴 衣  
り、

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>せいとく</sup>聖徳は<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>いえ</sup>家に<sup>ぞく</sup>屬して<sup>えいえん</sup>永遠に<sup>いた</sup>至らん、

しゅはおうたり、かれはいげんをきたり、  
主王 彼 威嚴 衣  
り、

誦經) 主は王たり、



【 重聯禱 】

司祭) 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



司祭) 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



司祭) 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



司祭) 又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、



司祭) 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛宥、及び諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、



司祭) 又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>けだしなんぢ じれん ひと あい しみ</sup> 蓋 爾 は慈憐にして人を愛する神なり、<sup>われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup>我等光榮を爾 父と子と聖 神に獻ず、今  
も何時も世に、

ア ミ ン。

誦經) <sup>しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ しみ なんぢ あが ほ</sup> 主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾 は崇め讃  
<sup>なんぢ な よよ どうと うた</sup>められ 爾 の名は世に 尊 み歌わる、アミン。

<sup>しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ</sup> 主よ、爾 を恃むに因りて、爾 の 憐 を我等に垂れ給え、主よ、爾 は崇め讃めらる、  
<sup>なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと</sup>爾 の 誠 を我に訓え給え、主 宰よ、爾 は崇め讃めらる、爾 の 誠 を我に悟らせ  
<sup>たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま</sup>給え、聖なる者よ、爾 は崇め讃めらる、爾 の 誠 にて我を照し給え。  
<sup>しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き</sup>主よ、爾 の 憐 は世に在り、爾 の手の造りし物を棄つる勿れ、讃 は 爾 に歸し、  
<sup>うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>歌は 爾 に歸し、光榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) <sup>われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ</sup> 我等主の前に吾が晩の 禱 を増し加えん、

しゅあわれ めよ 。  
主 憐

司祭) <sup>しみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾 の恩 寵 を以て、我等を助け救い 憐 み護れよ、

しゅ あわれ めよ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup> 此の晩の 純 全・成 聖・平 安・無 罪ならんことを主に求む、

しゅ た ま え よ 。  
主 賜



司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと</sup> 平安の天使、正しき 教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup> 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup> 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと</sup> 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我等の生命の 終 がハリストスにに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
<sup>おそ べ しんばん おい よろ こたえ たま もと</sup> リストスの畏る可き審判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちょさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) <sup>けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup> 蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に獻ず、今も

<sup>いつ よよ</sup> 何時も世に、



司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆 人に平安



司祭) <sup>われら こうべ しゅ かが</sup> 我等の首を主に屈めん



司祭) (黙經 <sup>しゅわ かみ てん かが じんるい すく ため くだ もの なんぢ しよぼく なんぢ</sup> 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の

<sup>しぎょう かえり たま けだしなんぢ しよぼく なんぢおそ ひと あい</sup> 嗣業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する

<sup>しんばんしゃ こうべ かが おのれ くび ふ ひと たすけ ま すなわちなんぢ あわれみ</sup> 審判者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を

<sup>ま なんぢ すくい あお もと かれら つね まも かれら こ ゆうべ つぎ いた</sup> 俟ち、爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る

<sup>よる およそ てきおよそ あくま かんぼう むな しりよ あ いねん まも たま</sup> 夜にも、凡の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給

え、)

<sup>ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい きんようさんえい いま いつ よよ</sup> 願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、



【 挿句讚頌 第5調 】

誦經) <sup>なんぢみ と てん はな きゅうせいしゅ うた こえ もつ ほ あ</sup> 爾身を取りたれども、天を離れざりし救世主ハリストスを歌の聲を以て讚め揚ぐ。

<sup>けだしなんぢ ひと あい しゅ わ やから ため じゅうじか し う ぢごく もん</sup> 蓋爾は人を愛する主なるによりて、我が族の爲に十字架と死とを受けて、地獄の門

<sup>やぶ みつかめ ふくかつ われら たましい すく たま</sup> を破り、三日目に復活して、我等の靈を救い給えり。

句 <sup>しゅ おう かれ いげん き</sup> 主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

讃頌 <sup>いのち ほどこ しゅ なんぢ わき さ しゅうじん ため ゆるし いのち すくい なが</sup>  
生を施す主よ、爾は脅を刺されて、衆人の爲に赦免と、生命と、拯救とを流し、

<sup>み もつ し う われら ふし たま はか い われら と かみ おのれ とも しえい</sup>  
身を以て死を受けて、我等に不死を賜い、墓に入りて我等を釋き、神として己と偕に至榮

<sup>ふくかつ たま ゆえ われらよ ひと あい しゅ こうえい なんぢ き</sup>  
に復活せしめ給えり。故に我等呼ぶ、人を愛する主よ、光榮は爾に歸す。

句 <sup>ゆえ せかい けんご うご</sup>  
故に世界は堅固にして動かざらん。

讃頌 <sup>ひと あい しゅ なんぢ じゅうじか てい ちごく くだ きみょう けだし</sup>  
人を愛する主よ、爾が十字架に釘せらるると地獄に降ることとは奇妙なり、蓋

<sup>なんぢ ちごく とりこ こせい めしうど かみ おのれ とも しえい ふくかつ らく</sup>  
爾は地獄を虜にして、古世よりの俘囚を神として己と偕に至榮に復活せしめ、樂

<sup>えん ひら かれら そのうち い たま ゆえ なんぢ みつかめ ふくかつ さんえい われら</sup>  
園を啓きて、彼等を其中に入れ給えり。故に爾の三日目の復活を讚榮する我等にも

<sup>つみ きよめ あた らくえん おもの な たま なんぢ ひとりじんじ しゅ</sup>  
罪の洗淨を與えて、樂園に居る者と爲らしめ給え、爾は獨仁慈なる主なればなり。

句 <sup>しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた</sup>  
主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

讃頌 <sup>われら ため み くるしみ う みつかめ し ふくかつ じんあい しゅ わ にくよく いや</sup>  
我等の爲に身に苦を受け、三日目に死より復活せし仁愛の主よ、我が肉慾を醫し、

<sup>われら はなはだ しょざい おこ すく たま</sup>  
我等を甚しき諸罪より起して救い給え。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

生神女讃詞 <sup>いととうと どうていちよ なんぢ でおよ もん みやおよ おう ほうざ わ しょくざい</sup>  
最尊き童貞女よ、爾は殿及び門なり、宮及び王の寶座なり。我が贖罪

<sup>しゅ ぎ ひ おう そくて もつ おのれ ぞう したが つく もの てら ほつ</sup>  
主ハリストス、義の日たる王は其手を以て己の像に従いて造りし者を照さんと欲し

<sup>なんぢ よ くらやみ ねむ もの あらわ たま ゆえ ほ うた もの かれ まえ はは</sup>  
て、爾に依りて闇冥に眠る者に現れ給えり。故に讚め歌わるる者よ、彼の前に母の

<sup>いさみ え もの われら たましい すく つね いの たま</sup>  
勇敢を獲たる者として、我等の靈の救われんことを恒に祈り給え。

奉神者シメオンの祝文 <sup>しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ</sup>  
主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

<sup>けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん</sup>  
しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を

<sup>てら ひかり およ なんぢ たみ さかえ</sup>  
照すの光、及び爾の民イスライリの榮なり。

聖三祝文 <sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を 潔くせよ。主宰よ、我等の 愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は 爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま  
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は 爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。



【 主日の發放讃詞 第5調 】

しんじゃよ、ちち と せいしんとともに はじめ  
信者 父 聖神 共 始  
なきことば わがすくいのため えに  
言 吾 救 爲  
どうていぢょよりうまれしものをほめうとうて  
童 貞 女 生 者 讃 歌  
おがむべし、かれあまんじてそのみにて  
拜 彼 甘 其 身  
じゅうじかにのぼ おりしをしのびそのこ  
十 字 架 上 死 忍 其 光

う え い の ふ く か つ に て し せ し も の を  
 榮 復 活 死 者  
 ふ く か つ せ し め た ま あ え ば な あ り 。  
 復 活 給

【 生神女讃詞 第5調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き 歸 す 、 い 今  
 光 榮 父 子 聖 神  
 ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 何 時 世 世  
 と お ら れ ぬ し ゅ の も ん よ 、 よ ろ こ べ 、 な ん ぢ に  
 通 主 門 慶 爾  
 は し り つ く も の の か き と お お い よ 、 よ ろ こ  
 趨 附 者 の 垣 墻 幟 幟 慶  
 お べ 、 お だ や か な る み な と よ 、 こ ん い ん を し  
 穩 湊 婚 姻 識  
 ら ず し て 、 み に て な ん ぢ の ぞ う せ い し ゅ お よ  
 身 爾 造 成 主 及  
 び か み を う み し も の よ 、 よ ろ こ お べ 。  
 神 生 者 慶  
 な ん ぢ の さ ん を ほ め う た い て お が む も の の た め  
 爾 産 讃 歌 拜 者 爲  
 に や め ず し て い の り た ま あ え 。  
 息 禱 給

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup> ハリストス神我等の <sup>こうえい なんぢ き</sup> 特よ、光榮は爾に <sup>こうえい なんぢ き</sup> 歸す、光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ  
 何 時 世 世 主 憐 主  
 あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
 憐 主 憐 福 降  
 せ 。

司祭 <sup>し ふくかつ</sup> 死より復活せし <sup>われら まこと かみ</sup> ハリストス我等の <sup>そのしじょう</sup> 眞の神は、 <sup>はは こうえい</sup> 其至淨なる母、 <sup>さんび</sup> 光榮にして <sup>せい</sup> 讚美たる聖  
<sup>しと こくしょうほうしん</sup> 使徒、 <sup>わがしよしんぶ</sup> 克肖捧神なる我諸神父、 <sup>およ しょせいじん</sup> ( 某 ) 及び諸聖人の <sup>きとう</sup> 祈禱に <sup>より</sup> 因て我等を <sup>われら あわれ</sup> 憐み救  
<sup>かれ ぜん</sup> わん。 <sup>ひと あい</sup> 彼は善にして <sup>しゅ</sup> 人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
 神 我 國 天 皇 及  
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ  
 國 司 者 我 等 府 主  
 き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
 教 及 悉 正 教  
 の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン 等 を 、 い く と せ に も ま も り  
 た ま え 。  
 給